

片岡千壽／咲くやこの花インタビューvol.2

片岡千壽(かたおか・せんじゅ)【平成25年度 演劇・舞踊部門[歌舞伎]受賞】



2016年8月9日(火)に山本能楽堂にて、咲くやこの花コレクション『片岡千壽 能楽堂でワークショップ』を開催します。ホストを務めるのは、都会的な外見とは裏腹に、関西らしい陽気な素顔も魅力的な上方歌舞伎役者の片岡千壽さん。平成9年開塾の松竹・上方歌舞伎塾に第一期生として学び、卒塾した平成11年12月に片岡秀太郎に入門。平成24年に名題昇進。上方の女形を修行する一方、昨年夏には歌舞伎塾の同期3名と、あべの歌舞伎「晴の会(そらのかい)」を発足。今年5月には市川染五郎主演『獅子王』のラスベガス公演に参加するなど、今もっとも活躍が期待される歌舞伎役者の一人です。今夏も目白押しな出演作の中から、自身の名を施した歌舞伎ワークショップについてお話を伺いました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「見得を切り「黒川っ！」と声が掛かった瞬間、ハマった」

ワークショップという形態は、咲くやこの花コレクションとしても初の試みです。山本能楽堂でも歌舞伎のイベントは初めてだそうですね。



今回、山本能楽堂という空間でできるのが面白い。舞台から客席もすぐそばですし、チラシにも「片岡千壽 Kataoka Senju」とローマ字付きで名前が大きく入っているので、自然と気合いが入りますよね(笑)。副題に「～初心者にもわかる歌舞伎の楽しみ方～」とあるように、外国の方でも楽しめるよう同時通訳を入れて、インターナショナルな感じでやらせて頂こうかなと。

市川染五郎さんのラスベガス公演『獅子王』に出演された千壽さんが言うと、説得力があります。



ラスベガス公演では河童と蟹の役を演じて…って、想像もつかないでしょうけど(笑)。ワークショップではラスベガス公演から、河童丸の舞いをひとくさり(一部)踊ります。黒人のラッパーが三味線に乗せて歌う英語のラップに合わせて、日本舞踊を踊ります。同期のりき彌にも手伝って頂きながら、お客様にも舞台へ上がっていただこうかなと。例えば、僕が立回りや見得の見本を見せるので、その後同じようにやってもらうとか。また、当日はツケ打ち〈★1〉の方もいらっしゃる、客席からエア(空気)で物を投げてもらって、見えないものに音をけるのも楽しそうだし。歌舞伎の演出にも注目してもらえれば、今後の観劇が面白くなると思います。

※〈★1〉ツケ打ち……ツケ板に木を打ちつけて効果音を出す人

一般家庭から歌舞伎界に入られた千壽さんならではの視点が光りそうです。そもそも、歌舞伎界を志したきっかけとは？

叔母から松竹・上方歌舞伎塾第一期生募集の話を聞いた母が「裕介(本名)興味ある？」と。当時は中学卒業間近で、歌舞伎も観たことがなかったですし、面倒なので一度は断ったんです。でも、ふと思った。このまま普通に高校、大学と進学するより、ちょっと変わったことがしたいなと。最初は「嫌やったらやめたらいい」ぐらいの軽い気持ちでした。関西弁でいう、いちびり。人前で何かをするのが好きな、調子乗りだったので(笑)。

”いちびり”エピソードはありますか(笑)？

中学2年の時に文化祭で漫才をやりました。ボケ担当で、コンビ名は忘れたな～。制服のブレザーにシャツ着んと素肌にネクタイを絞めて、アラビアンナイトみたいな格好して。自分で言うのもなんですが、めっちゃうけたんですよ(笑)。それに味を絞めて、来年もやろうかという話でしたが、もうその時は音楽にハマってバンドでボーカル、ギターをやっていました。それもあってか、歌舞伎塾では三味線やお琴など、弦楽器の勉強は楽しかったですね。

歌舞伎塾では、どんなことを学ばれたのでしょうか。

月～金曜まで、平日の10時半からひとコマ1時間半の授業が4つあるんです。踊り、三味線、お琴、華道、茶道、鳴り物、歌舞伎実技、化粧、長唄、清元、地唄、義太夫など一通りやって。最初は着物も着れないので、帯の結び方から1時間半みっちり。そういう日々を過ごしていると、どっかで楽しくなってくる。昨日鳴らなかった鼓の音が今日鳴ったり、毎日新しいことを教えて頂けるわけですから。1年後には中間発表会が道頓堀の中座であって、私は三味線を弾いたのかな。上方舞、義太夫、最後に歌舞伎芝居の発表となり、私が七三で見得を切ったところに本名の「黒川っ！」と声が掛かって、「気持ち良いー！」と。あれを味わうと、やめられなくなる(笑)。



聞いているだけでもワクワクします。そこから、女形に決められた理由とは。

習いたてのころは、女性らしいしぐさをするにも抵抗があるわけですよ。でも、卒業後に女形が増えてきて、自然と決まりました。師匠や周囲のすすめもありますし、見た目のこともありますけどね。同期の千次郎は男女ともに演じますが、松十郎は、基本的に立役(男役)です。



平成 11 年 3 月の卒塾と同時に、大阪松竹座公演『仮名手本忠臣蔵』で初舞台。当時は黒川裕介の本名で、村松三太夫他での出演でした。初舞台は今でも覚えていらっしゃいますか。

何もできなかった記憶がありますよ。家に当時の写真がありますが、見られたもんじゃない。お化粧も勉強はしていましたが、かなりヒドイです(笑)。松の廊下の場面では「お待ちください！」と下手から長袴(★2)を穿いた人が何人か出てくるんですが、同期のりき彌は後ろの人に裾を踏まれてバーン！とコケてました。直後にその勢いの流れのまま立ち上がってましたけど(笑)。

※(★2)長袴……袴の袴の丈を通常より 1.5 倍程度に伸ばし、裾を引きながら穿くようにした礼装。歌舞伎では見栄えの問題から通常の丈の 2 倍とも言われる

(笑)。切磋琢磨できる同期の存在もありがたいですね。その後も研鑽をつまれて平成 25 年に「咲くやこの花賞」に輝きました。

びっくりしました。ある日、突然旦那(師匠の片岡秀太郎さん)からこういう話があると聞かされて。正直、自分では判断がつかなかったので旦那の判断にお任せしたところ、「頂きなさい」と言ってもらえたので、ありがたく頂戴しました。

翌年には早くも咲くやこの花コレクション「片岡千壽 咲くやこの花賞受賞記念の会」が大阪倶楽部で開かれました。当日は師匠のサプライズ登場も場を沸かせましたね。

ちょうど私が着替えをしている最中の休憩の時間に、客席から舞台に上がって頂いたようです。楽屋にはモニターがなく音が聞こえなかったので何しゃべっているのだろうと、ありがたくもあり怖かったですよ(笑)。

師匠の掛け声のもと、最後は同じく客席で観ていた同期の片岡松十郎さん、片岡千次郎さんも舞台に上がり「今後の上方歌舞伎を担っていく3人です」とのご紹介がありました。その3人で、昨年あべの歌舞伎「晴の会(そらのかい)」を発足されたんですね。



今いる同期5人〈★3〉は仲が良さそうですね、あと一人片岡愛一郎がいますが、彼はいま愛之助さんに弟子として付いています。とくに昔から千次郎、松十郎の二人とはよく上方歌舞伎を盛り上げたいと話しています。お酒が入るとより熱く「何かやりたいな」という話になる。そんな時、3人が同時に名題試験に受かったこともあり、この偶然には何かあるんじゃないかと。丁度その時に近鉄アート館様よりお話を頂きまして、また、松竹株式会社様のご協力を頂き「晴の会」の発足に至りました。

※〈★3〉同期 5 人…片岡松十郎、片岡千壽、千次郎、片岡佑次郎、片岡りき彌

3人というのが良いバランスなんだろうね。

ほんまにね、(性格は)全然違いますよ。二人はタイプの違う真面目さがある。千次郎は何かにつけて几帳面やし、松十郎は一番年上ですし。物事を引いてみながらコツコツやるタイプ。私も A 型なのでもちろん細かいことも気になりますが、わりと雑なところもあります。最終的にまあ大丈夫やろう、となる(笑)。女形なこともあり、わりとこっち聞いてあっち聞いて、二人の女房的存在かなあと、勝手に思っています。

「染五郎さんの舞台ではいつも、お笑い部門担当です(笑)」

冒頭のラスベガス公演をはじめ、染五郎さんとは色々な作品で共演されています。印象的なのが、平成 16 年大阪松竹座公演「天竺徳兵衛韓噺」で演じた大抜擢のお姫様役・銀杏の前。最近では平成 24 年の大阪松竹座公演「大當り伏見の富くじ」で演じた犬(!)の小春がとても評判になりました。

「天竺徳兵衛韓噺」ではそこまでお話できなかったのですが、それ以降、急激におしゃべりするようになって。例えば、奈落に私がやったと分かるような小道具を仕込んで、それを見て染五郎さんが笑う、とか。「大當り伏見の富くじ」で狎(ちん)の小春をやらせて頂いたことで、完全に「面白いことやるならお前！」となったんじゃないでしょうか(笑)。

楽屋での楽しい雰囲気伝わってくるようです。

染五郎さんも、関西がお好きですから。「大當り伏見の富くじ」は、松竹新喜劇「大當り高津の富くじ」でも知られる上方落語がもとのお話ですし。近松ゆかりの上方狂言「女殺油地獄」で使ってもらったときは、「北の新地の場」で客席を練り歩き、面白いことをひとくさりやってから本題に入るという仲居のお駒役でした。ラスベガスの河童丸しかり、だいたいいつもお笑い部門なんですよ(笑)。



千壽さんといえば、女形の一方、ろくろ首、女狸、狼、白ねずみ…など、“人じゃない役柄”にも定評があります。

持ち味、なんですかね。やって楽しいんです。7月末の第二回あべの歌舞伎「晴の会」でも「伊勢参宮神乃賑わい 旅立ち～七度狐」で狐役に扮します。これは、小春ほどにはぶっとんだ役ではなく、ちゃんとした狐なので大丈夫です(笑)。

賑やかな魅力の一方、目指されるのは片岡秀太郎師匠の境地だそうですね。

やっぱり一番は、そこですよね。上方物のお芝居において師匠の右に出る人がいない。私もお姫様よりは、色街の女将のような花車方(かしやがた)をやりたい。なぜかと言うと旦那(師匠)がやっているから。楽屋にいるような素に近い感じで舞台に出てしまうのに、芝居になってしまう。演じているようで演じていない、この素晴らしさ。もちろん師匠も演じてはいるんでしょうけど、究極ですよね。すべてにおいて凄いお方です。

賞で認められ、熱く語れる仲間もいて、目標とする師匠が身近にいる。とても刺激的な環境に身をおかれているのでは？



環境としてはすごく幸せです。やっぱり知れば知るほど難しい世界ですから、年々怖さも増えてきてますよ。ある程度の役が振られるようになってきましたから、失敗するわけにもいかんなど。でもそこで「あれ、千壽ってそんなもん？」となってもつまらない。そうならないためにも、一生懸命必死に考え抜いてやっています。

普段もどっぷり歌舞伎漬けですか？

最近 9 日間休みがあったのですが、一日たりとも家にじっとしていられなくて、すぐに佑次郎を呼び出して神戸で飲んだり。昼間に部屋の片付けをしても大量の雑誌「演劇界」を見出すと止まらなくなる。携帯を持てば動画サイトで「今月の歌舞伎」とか検索して見入ってしまった。「ああー！ 違う違う、今日は休

みやぞ」とか思いながら、一日足りとも歌舞伎から離れられない。不安なんでしょうね、歌舞伎に触れない生活はもう無理ですね。

7月末から「晴の会」の新作上方歌舞伎「伊勢参宮神乃賑」があり、その流れで8月2日には「ようこそ歌舞伎の世界へ！」と題した出演者によるワークショップ、そして9日には咲くやこの花コレクション「片岡千壽 能楽堂で歌舞伎ワークショップ」と、この夏は出演作が目白押しです。

「晴の会」は東京でも応援してくださる方が多いです。いつも仲良くして頂いている中村壱太郎さん、中村隼人さんはブログでご紹介してくれたり。市川九團次さん、中村橋之助さん、もちろん染五郎さんも僕らの活動にはとても喜んで頂いていますね。

頼もしいですね。では、改めて今後の目標をお聞かせください。

一番は、関西で歌舞伎公演が少しでも増えること。8月24、25日には国立文楽劇場で「上方歌舞伎会」を開催します。「晴の会」では新作を「上方歌舞伎会」では古典をきっちり勉強していきたい。どちらも我々の世代が中心となり、公演を続けていくことで役者や上方歌舞伎を知って、覚えていただく。一人ひとりが死に物狂いで頑張れば、結果に繋がると思います。個人的には、まだまだ師匠に教えて頂きたいことがたくさんあります。7月からは、久々に一緒です。4、5、6月とずいぶんと離れていたのです。

緊張するという意味ですか？

緊張はしませんが、今しゃべっていて思いましたけど、一緒にいると一番落ち着く。師匠がそばにいないことが不安なんですね。旦那やったらどうするんやろうって、日々思いながら舞台に立っているのです、やっぱりいないとダメなんでしょうね。向こうは嫌がると思いますけど。最近も「君の芝居が僕に似てるって色んな人に言われるんよ、何でや」と。何ででしょうね？ ととぼけつつ、内心「真似しているからでしょう！」って（笑）。憧れですよ。



師匠や仲間との関係、何より華があるのに飾らない千壽さんの人柄が分かれると、より親近感をもって歌舞伎が楽しめそうです。ワークショップは人柄を知っていただくのにも絶好の機会と言えますね。

堅苦しいのも大切ですが、何でも楽しくできたらいいと思います。そもそも歌舞伎は娯楽なので、難しいものでも何でもなし。ワークショップでは歌舞伎初心者から外国人まで楽しめる、盛りだくさんな内容でお届けしますよ！



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】

……私にとっての大阪名物は上方歌舞伎です。難波は松竹座、天王寺は近鉄アート館、日本橋の文楽劇場、梅田も色々と劇場がありますし。今後も至るところでバンバンと、公演が打てればいいなと思います。そうなる事によってもっともっと歌舞伎が色々な方に知って頂ける事につながると思います。私も微力ながら精一杯精進したいと思います。